
おまもりやどり

虎太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おまもりやひとつ

【Zコード】

Z5990Y

【作者名】

虎太郎

【あらすじ】

神社のお御籤で大凶を引いてしまった不幸な少年、石動 宗一郎。

彼は神主に唆され、3000円のお守りを購入してしまった。翌朝、彼のお守りに宿っていたのはなんと生まれたばかりの神様「天之子之命」だった。

身長10cmの小さな神様が生み出す、ハートフルはちゃめちゃストーリー。

神道バカの虎太郎がお送りする、二作目の神様シリーズ。
250人中、7位に入選した優秀作品です。
どうぞ、ご覧下さいませ。

●『不幸は突然にやってくる』（前書き）

「Jの作品は「15000文字以内」とこいつの題で作りれた作品です。

初めて虎太郎の作品を「J覧」になる方も、一度目になる方も、どうぞ、「Jゆるりと神様ストーリー」を堪能くださいませ。

（タイトルを見て「おまもり おりじやねえか！」と思われた方も
ぜひ一度、「J覧下さいませ）

壱『不幸は突然にやつてくる』

物事はいつだって、こゝちの事情など関係なく訪れる。

そして不幸は突然やつてくるのだ。

氣晴らしに天ヶ先神社に立ち寄つて、氣まぐれにお御籤みくじを引いた。ただ普通に、何気ない一日を過ぐしていただけなのだ。

「何だ、コレは」

思えばこのとき、お御籤で大凶を引いてしまったこと自体が、これから続く不幸の始まりだつたのかも知れない。

手の中にある紙切れから禍々しいモノが煙のように立ち上つているようだつた。もつとも、その神様からの不幸なお告げを引いてしまつた不幸な少年、石動宗一郎に靈感などあるはずもなく、それが目に見えたわけではない。

大凶　お御籤の中で最も悪いとされるお告げ、運勢のびりつけ。大凶という禍々しい文字の隣には、可愛らしい花柄に囲まれて「あなたの花は黒百合くろひまりです」と書かれていた。

さらに隣には花言葉が。恐る恐る田線を横へと移す。

……ちよつと待て、黒百合の花言葉は？呪い？じゃないか！

何でそんな不幸な花を載せてあるんだ。

やんわりと彩いろどられている花柄でさえ恨めしく思えてくる。

『【運勢】大凶　夢も希望もありません。努力をすればする程、底無し沼にはまつたかのように深い闇に沈んでいきます。ここはひとまず落ち着いて行動をして、良い運気が流れてくるよう待ちましょつ』

逡巡しうんじゅんの迷いなく手の中で紙クズ同然に握りつぶすと、お社やしろを背にして力の限り投げ捨てた。丸められたお御籤は弧を描いて、町の景色が広がる階段のむこうへと消えていく。

ぞまあみる。

ふん、と鼻息を荒げて神社を後にじょりと、お御籤が消えていった階段へと足を踏み出した。

突然、足元がぐらりと揺れ、大きくバランスを崩す。自分の足の裏に大きな石があり、気づかずに足を乗せてしまつたときには、既に階段が目の前に迫つていた。

地面と空とが繰り返し視界に入つてくる。同時に全身に痛みが走る。

世界が八度ほど回つた後、階段下の石畳へ背中を打ちつけじょりやく止まつた。

頭に浮かんだのは大凶の一文字。むしゃくしゃして、頭を搔きむしる。栗色の髪が宗一郎の心境を表しているかのよひに、乱暴な形になる。

「おやおや、どうなされました」

天を仰ぐ宗一郎の目の前にクシャクシャのお御籤を手にした、白い着物の男が覗き込んできた。

「ははあ、それはまた災難でしたねえ……」

あらかた説明をし終えると、この神社の神主だと名乗る男は微笑みながら何かを差し出してきた。

神主の手の上には、赤や白の紐が幾重いくえにも編み込まれたお守りしきものがあつた。

「お守り……です、か？」

「その通りですな。ただし、そこしゃむしょの社務所で売つているような代物じゃありませんがね」

神主は宗一郎へ顔を近づけると、にたあと笑いながらお守りを手綫の高さまで持つていぐ。

「このお守りは代々、この神社に伝わる特別な祈祷を経て作られたお守りでしてねえ」

と、神主はお守りの紐を摘むと、振り子のように動かす。

「開運なんてモンじゃないですよ。なんせ悪霊を払うための強力な護符なんですから。だから大凶なんて出ても、これを持つてれば関係ないんですよねえ」

思わず生睡を飲み込んでしまう。喉から手が出る、というのにはこの事だらう。

今まさに、揺れ動くソレを掴み取ろうと右手に力が入っているのだから。

「一万円」

「……高いッ」

「の所なんですが、見たところ学生さんですよね？」

よれよれのズボンに大きくはみ出している白地の半袖シャツ。胸ポケットには宗一郎が通っている桜花学園を示すバッヂが煌々と輝いている。

虚を衝かれて押し黙っている宗一郎を氣にも留めず、神主は続けた。

「学割つていうのかな？ それで大まけのおまけ、三千円つてのはどうかねえ？」

「たか」

「これ以上は割引できません。それに……いらないならいいんですよ」

神主は急に興味を失ったかのように、社務所へと踵を返そうとする。

階段へ足をかけた所で、宗一郎の右手が神主の袴を掴んだ。

「買う、買うよ！」

冷めた神主の眼に光が戻る。先程の態度が嘘のよつに微笑んだ。

「毎度ありい」

宗一郎の背中を見送る神主に、一人の巫女が近づいた。

「神主様」

「なんでしょう」

「また、お御籠の中身を替えましたね？」

「はて？」

「また、お守りを不当な価格で売り払いましたね？」

「はて？」「

「あれ、安産祈願のお守りですよね？ 七百円の」

「ええ。でも、ちゃんと中の紙を入れ替えたのでいいじゃないですか」

「神主様　！」

その夜、宗一郎は買ったお守りをジッと見つめていた。

お守りを何処につけよつか悩んでいたが、やはり一番身近にある携帯電話に結わいつけた。

うん、何だか頼もしく見える。

宗一郎は田覚まし時計のアラームをセットして、携帯電話を枕元に置いた。

きっと明日には平穩な日常が戻っているに違いない。そう祈つて宗一郎はゆつくつと瞼を閉じた。

『不幸は突然にやつてく』（後書き）

階段を転げ落ち、やがてには神主には説かされた宗一郎。
不幸続きの少年は、平穏が訪れるよつこと、その胸に希望を抱き、
眠りにつく。

翌朝、彼はその願いが永遠に叶わぬ夢だとつて気がつかされ
るのだった

次回『神様も突然にやつてくる』
どうぞ、『期待あれ。

武『神様も突然にやつてくる』

宗一郎は毎日けたたましい日覚まし時計の電子音で起きていたが、その日は珍しくアラームの時刻よりも早く起きた。

「く……あ

深い眠りに入っていたのか、一度も起きることがなかつたため目覚めは良好だ。

大きく背伸びをして枕元にある携帯へと手を伸ばしたとき、ふと可愛らしいものが宗一郎の目に入つた。

「ん、くう

携帯電話の大きさと同じくらい、もしくは一回り小さいくらいの女の子だった。

それが携帯電話の上で猫のよつに丸まつており、静かに寝息をたてていた。

白い着物に足首まで覆われた赤の袴……いわゆる巫女装束おにじょ はやくというやつだらうか。

髪は縮こまつた身体と同じくらいまで伸びており、鳥の濡羽色かじか ぬねはいろが水の上で揺らめくよう、白い携帯電話の上に広がつている。

「んうー

初め、宗一郎はそれが人形か何かだと思つた。

手のひらに納まるくらい小さな人間など、いないからだ。しかし微かに上トする胸が『生きている』と語つていた。

その光景に呆然ぼうぜんとしていたが、寝返りをうつ少女を見ていると、胸の奥が妙にくすぐつたくなつた。

宗一郎は己が心の思つままに、右の人差し指で少女の頬ほおを突く。

感触は とても柔らかかつた。

女の子の身体は電気が走つたかのよつにビクンと震えると、先程より一層縮こまつてしまつ。

その仕草を田の当たりにし、小さい頃ハムスターを突いたときには

感じた、言い知れない感情が宗一郎の胸中に広がる。さらに「一回、突いた。

「く……う」

四回ほど突いたあたりで、少女の額に筋が浮かび上がる。それに気づかないまま宗一郎はもう一度指を近づけ、絶叫した。「いつつてえ！？」

慌てて指を引っ込めるが、携帯電話の上で犬のようにならうな姿があった。

痛む指を見ると、小さな歯形がついていた。

「痛いのはこっちのほうさ。酷いね、人が気持ちよく眠つてこりのに、不埒だよ」

自らの袖で下半身を庇い、小悪魔のよくな笑みを浮かべた。

着物が弛んで胸元が露になつた姿は、普通、健全な男子にとつて目に毒な光景である。

が、目の前の少女は小さすぎる上に胸が板であるため、虫眼鏡でも持つてこないと色気の欠片さえ感じられない。

「いや……そもそもお前、誰なんだよ。しかも人の携帯の上で……なにしてんだ」

「ん？」『けーたい』……

およそ重力というものを感じさせないような身のこなしで、ふわりと浮き上がるようになつて少女は立ち上がる。

「これかい？」『けーたい』というのは、

青竹踏みのように、何度も携帯電話を乱暴に踏み荒す。

「あ」

すると、少女の足元から光が現れ、携帯電話を照らした。

光の泉、と言えばいいのだろうか。白き光源が少女の両足の間で明滅している。

携帯電話の光ではない。

きれいだなあ、と思った矢先、何かの弾ける音が携帯電話から発せられた。

先程まで眩しかった光も、急速に失われる。

「やつちやつたみたいだ」

「ばつが悪そう」、少女は宗一郎を見上げてそう言った。

背中にひやりとしたものを感じた宗一郎は、少女が携帯電話の上に乗っているにも関わらず、携帯電話を開いた。

ディスプレイの向こうで「おわつ」と悲鳴を上げて落ちてしまつ少女。

その悲劇に眼もくれず、宗一郎は田の前の惨劇に大声を上げた。

「うわああ！ 携帯が……」

液晶画面に無数のひび割れ線が走つており、電源ボタンを押しても反応はなかつた。

ディスプレイのつぶんから、申し訳なさそうに少女は顔を覗かせた。

「ごめんよ。つい力が……」

「力つてお前、一体何者だよー。」

「か 神だ」

式　『神様も突然にやつてくる』（後書き）

宗一郎の願つていた平穏な日常は、ただ一人の少女によつて打ち碎かれた。

体長10cm、黒髪ロングヘアに巫女装束。自称神様のこの少女は、いつたい

次回『天之子之命』
どうぞ、ご期待あれ。

「あ～あ、本当に壊れちゃったよ」

学校へ向かうため電車を降りて、宗一郎は大通りを歩いていた。周りには多くの会社員やら学生やらがそれぞれの目的地へと向かっている。その中に宗一郎もいた。

「うう、謝ったじゃないか キミも意地悪だなあ、いい加減許しておくれよ」

携帯電話の上で少女 もとい神様が、正座のまま縮こまつっていた。

「それで……ええと、なんだっけ。名前」

「天之子之命『あま の し の みこと』」

「そうそう、あまの……何だっけ」

「天之、子之、命！ 遠回しに人を虜めるのが好きみたいだね、キミは」

宗一郎の目の前で頬を膨らます自称『神』の少女、天之子之命。「それで……アマノ、シノ、ミコト？ それ以外は何も分からぬのか」

「……うん、残念ながら。僕は神と言つたけど、神階は下の下。キミたちが思い浮かべるような、全知全能の存在じゃないんだ」

発現したばかり そう彼女は言った。

携帯電話が壊れた後の……今朝の出来事を宗一郎は思い返した。

・・・

「何故、ここにいるんだろうね」

自らを神と名乗った少女は、不思議そうに宗一郎へ聞いた。

「僕は、神具として祀^{まつ}られている刀に宿るべきだったんだけど何故、僕はここにいるんだい」

お守りの上で、まっすぐに宗一郎を見上げる天之子之命。少しだけ焦りの色が見えた。

「僕はそこに宿らなければならぬんだ。ねえ、どうすればいいのかな」

「どうすればいい……」

宗一郎はわけが解らなかつた。朝起きたら小さな少女が寝ていて、触つたら噛み付かれて、携帯電話は壊されて、あげくの果てにどうすればいいかときたのだから。

「じゃあそこに行けばいいじゃないか。その、宿るべきシンググ？

へ

「行けたら苦労はしないんだけどね」

見ててよ、とお守りの上で歩き出そうとする天之子之命。お守りから十センチほど離れたかと思うと、天之子之命の眼前でバチバチと火花が散つた。

見えない何かに阻まれたのか数歩下がり、肩をすくめる。

「ほりね。これ以上はお守りから離れられないんだ」

「どうして、なんだ？ どうして離れられないんだよ

「恐らく、なんだけど……」

顎に手をあてがい、うーんと考へる。

「……誤つて宿つてしまつたみたいなんだ。このお守りに、ね

ど二か諦めた口調で、天之子之命は足元のお守りを指した。

参 『天之子之命』前編（後書き）

手違いによつてお守りへ宿つてしまつたといつ神様『天之子之命』。

生まれたばかりの彼女は、自らの境遇に戸惑つていた。そんな彼女を見越し、宗一郎は何気なく話題を変えていく。

そして彼女は、新たな名前を与えられるのだった

次回『天之子之命』後編
どうぞ、ご期待あれ。

「しかし、天之子之命って言いにくいな
あまりにも落ち込んでいる天之子之命を見かねて、話題を変える
よう宗一郎は心がけた。

神様に気をつかうというのも変な話だ。

「天は空という意味で、高天原の一字を貰い受けたんだ。子は、そ
の高天原で生まれた神を表すとして付けでもらった。僕は嫌いじ
やあないな」

「じゃあ天は御天道様の天で、子は子供の子か？」

「うん。命は生命の命だけど、神を呼ぶときにはわざと抜く場合も
あるんだ。言いにくいなら命を抜いてもらつてもいいよ」

「じゃあ……天子つてのはどうだ？……無理やり天つて読まなく
ていいだろ、別に」

口にした後、少し馴れ馴れしいことをしたなと宗一郎は思つた。
まるで俺が彼女をあだ名で呼びたいみたいじゃないか。

そんな宗一郎の思いとは裏腹に、彼女は携帯電話の上でキラキラ
と瞳を輝かせていた。

「てんし……天子。ふふ、良い響きだね」

どうやら氣に入った様子で、何度も頷いては「天子」と名前を確
認するように自分に言い聞かせていた。

「どうやら、キミからも良い名を貰つてしまつたね。嬉しいよ
てへへ。気恥ずかしいのか、頬を搔く天子。

「そういえば、天子……本当に見えてないんだな、他の奴らに
ふと、宗一郎は辺りを見回した。

大通りを行きかう誰しもが、前を向いて歩いている。

時折、宗一郎と目が合つ通行人もいるが、すぐに目線を戻してし
まつ。

誰一人として、携帯電話の上に座っている天子に、気づかなかつ

たのだ。

「ほら、僕も一応は神だからね。人間に神が見える必要はないから、始めから見えないようになつていいのさ。キミの場合は、多分、これのおかげかな？」

歩く振動でゆれるお守りを指差す。

「また、お守りか」

「そう、そもそもコレが空っぽなのが、おかしいんだ」

ちょこんと正座をしたまま、天子は説明を始めた。

「もともとお守りには加護の力が宿っているんだ。その力は微弱ではあるけれど、多少の悪霊や、それらがもたらす……いわゆる不幸な出来事から守ってくれるんだよ」

指を遊ばせながら、天子はすらすらと説明する。

その姿は神様というよりも神道好きの巫女さんだった。

「だけどね、このお守り……宿つてみて気づいたんだけど、中は空っぽ 空洞だつたんだ。こんな、ただの飾りよりも厄介だよ。僕が宿らなかつたら、最悪、悪霊が入つていたかも知れないから」

平然と恐ろしいことを言つてのける小さな神様。

「よつほど適当に作つたのか、それとも神様なんていないと思つている人が作つたのかな。これを売つてた神社には、近づかないほうがいいよ」

「はい、神様」

「なんだい、急に？ せつかくキミが付けてくれた名前があるんだ、そつちで呼んでおくれよ。て、天子 つてさ」

へへへ、と照れ笑いをする天子。

「いつは想像以上に馴れ馴れしいな、と宗一郎は思つのだつた。

肆 『天之子之命』後編（後書き）

宗一郎から貰つた名前を、嬉しそうにかみ締める『天之子之命』こと『天子』。

しばしの時を共に過ごす中で、天子は少しずつ常識を覚えていく。そして、天子は問い合わせてしまつ。彼と、彼の周りのことを

次回『神様、トモダチって何だ?』どうぞ、ご期待あれ。

伍　『神様、トモダチって何だ?』

神様がお守りに宿つて三週間。

どうやら神様はテレビが大層のお気に入りのようで、暇さえあればテレビの観賞を催促するようになつた。

お守りから遠くへ離れられないため、一人でリモコンを操作することも敵わない天子。

必然的に、宗一郎がいなければテレビを見られない。

なんで無理矢理テレビを見なきゃいけないんだ。

宗一郎は「面倒」の一点張りで拒み続けた。

始めのうちは、ぶーぶーと文句を言つだけの天子だったが、最後には「リモコンを言霊に代えて携帯電話の中に宿らせよ!」と言い始めた。

宗一郎は携帯電話を壊された一件を思い出し「天子ならまた壊しかねない」と頭に過ぎつた。そのため、天子と一緒になくテレビを見るハメになつてしまつた。

「ねえ、キミ!」

「何だよ」

天子はテレビに釘づけだつた。映されているのは、昨シーズン人気を博した学園ものの青春ドラマだ。男同士の深い友情を描いた作品らしい。

再放送が決定したらしく、たまたまテレビをつけたら一、二話が放映されていた。

天子は、後ろに座る宗一郎へ問いかける。
「トモダチって何か、わかるかい?」

小さな口に入るよう、細かく碎いたポテトチップスをほお張りながら、天子は答えを待つ。

「動物で例えると群れ、だ」

「動物は自分たちを脅かす存在を恐れて、群れをなすものじゃないか。じゃあ、人間たちは何を恐れて群れているんだい？」

天子のその知識は先日、社会科の先生が授業中に語っていた内容だった。

誰も聞いてなかつたのに、聞いていたんだな。俺と同じで。

宗一郎は苦笑し、口を開く。

「多分、それは『孤独』を恐れているんだと思う。人間は寂しがり屋なのさ、一人でいると寂しくて死んじゃうんだよ」

「ふうん……じゃあ、キミは寂しくないのかい？」

ぴくり、と宗一郎の肩が跳ねる。胸に針が刺さつたかのように、心が痛む。

風呂やトイレといった場所を除いては、常に天子と一緒に過ごしていただ。

修理から戻ってきた携帯電話に、お守りをつけたからだ。だから学校も例外ではない。

そのため、天子は気になつたのだろう。

ドラマの中では主人公と友人がいつも教室内でふざけあい、笑いあつている。

その光景を、天子は宗一郎の身近で見たことがないからだ。宗一郎には、そう言つた友達がいなかつた。

男女共に入り乱れて騒ぎあう教室の中で、彼は一人だつた。

いつも宗一郎は窓際で景色を眺め、そんな彼を見る天子。それが二人の学校生活だった。

「寂しくない」

ポテトチップスを咀嚼する音だけが、耳の奥で空しく響く。

「そつか。僕は、寂しいと思っちゃうかな」

手についたポテトチップスをペロリと舐めると、天子は振り返つた。

「僕は一人だと寂しい。キミがいつも一緒にいてくれるから、今は

寂しくはない、かな」

テレビはちょうどコマーシャルに入ったようで、天子はグーッと

背伸びをすると、身体も宗一郎へ向きなおした。

「きっと……宿るべきはずの神具に宿つていたとしたら、僕は寂しかったと思うよ。一人で永遠に、誰とも言葉を交わすことなく、人々の信仰を受け続けるんだ」

淡々と天子は語る。

今、俺が聞いている言葉は神様の 天子の本音だろうか。

「でも、それが神なんだよね ああ、僕は幸せ者だなあ。こうして毎日、キミと楽しく過ごせているのだから」

曇り一つない笑顔を向けられた宗一郎は、あることに気づいた。そうか。天子と自分は似たもの同士だったのだ、と。

友達が 心を許しあえる人がいなかつた。

なんだか急に胸がくすぐつたくなる。

それは、自らが友達というものを遠ざけていた宗一郎が、初めて抱いた感情であった。

伍 『神様、トモダチって何だ?』（後書き）

お守りに縛られ、籠の鳥同然の天子は言つ。「僕は幸せ者だ」と。その言葉に戸惑いを覚える宗一郎だが、同時に彼の中で不思議な感情が沸き上がる。

言い知れぬ感情が彼の心に纏わりつく。そして彼は思い出してしまう。その感情の正体に

次回『おまえと出会って』

どうぞ、ご期待あれ。

「お前なら出来るだろ。何でもっと頑張んねえんだよー。」

それは遠い昔の記憶。

聞きたれた、とても懐かしい声だ。

「つるせえなあ……他人のくせにいちいち口出すなよ

これは、自分の声。

「なんだよそれ。俺はお前に頑張つてもらおうとだな

「いちいちうつとうしいんだよ。何だお前、俺が何しようと勝手だ

うつ

「はあ！？」宗一郎　てめえ、そんな自分勝手な奴だったのかよ

……マジがつかりしたわ

何が原因で口論したのかは覚えていない。

ただ、あのときは自分のことを何も解つてないんだと、この友人を突つ撥ねてしまった。

「勝手にしろ」

自分のことをたいして知らない他人に、とやかく言われるのほつととうしかつた。

この頃から宗一郎は人を遠ざけていた。

だが、次第に宗一郎の胸には言い表せない感覚が宿り始めた。まるで燃料タンクに穴が開いているかのように、自分の心から大切な何かが漏れていいる気分だった。

それを、ただの気のせいだと宗一郎は自分を騙し続けた。

本当は自分のことを解ってくれる友人が欲しいという、心の声から逃げていただけなのに。

ああ　くそ、胸糞悪い。

そして、宗一郎の思考が加速する。眠りから覚めるごとに、そう時間はかからなかつた。

・・・

急速に意識が覚醒した宗一郎は、自らの部屋……ベッドの上で目をさました。

何で今さら思い出すんだ。

大きくため息をついて、寝返りをうとつとした。腕を投げ出して縮こまろうとしたとき、視界の端に携帯電話 天子が映る。しまつた。

宗一郎は右腕に渾身の力を入れ、天子の数センチ上で見事に停止させた。

ムリに力を入れてしまつたために痛む右腕をさすりながら、携帯電話の上で眠る天子を見つめる。

ピクン、と身体を震わせては寝返りをうつ小さな神様。微かな衣擦れの音が宗一郎の耳に届く。

「こんなやつがいなければ、悠々と両手を広げて寝れるつてのになあ」

神様でも、一人は寂しいらしい。

初めて会つた日の夜のこと。宗一郎は気をつかい、他の部屋で寝ようとしたのだが「神様は寝ないんだ。だからキミの隣で悪靈から守つてあげるよ」と言い出した。

だが天子は、宗一郎よりも早く眠りに就いてしまつた。

本当に悪靈が退治出来るのかと思い、試しに『恐怖の心靈映像百連発!!』を見せたら「怖くて一人じゃあ眠れないんだ、僕と一緒に寝てくれ」と泣きついてきた。

今まで……家族以外の他人とこんなに長い時間を、共にしたことなんてなかつた。

冷え切つていた何がが、天子という神様と出会つたことによつて温められ、満たされてくのを感じた。

もしかしたら、自分は天子のことが なんて、宗一郎は考えてしまう。

いや、違う。違うんだ。

宗一郎はかぶりを振る。

きっと、いつか天子も本来いるべき所に戻るんだ。

そうしたら、またいつもの日常が帰ってくる。

しかし、宗一郎の胸には今まで感じたことのない、焼けるような痛みが宿つた。

天子 これもお前と一緒にいたせいなのか……？

気持ちよさそうに寝息をたてる天子を見て、宗一郎は瞼を下ろした。

傍らに眠る神様は、何も知らない。

自身が夢の中を彷徨つているときに、心を痛める少年の存在を。二人の間に聳え立つ、暗黙の了解。それは人間と神様という、途方もない壁だった

次回『ハハハ、ハハ』前編
どうぞ、ご期待あれ。

「そんなにムスッとしないでおくれよ。そんなんじゃ、本当に悪い気が迷い込んでしまつよ」

「うつさいよ」

週があけて月曜日となつた。

少し早めの時間に家を出たため、大通りを歩く人の数が少ないよう宗一郎は感じた。

しかし、それよりも気になつてゐるのは、今朝の天子とのやりとりだつた。

・・・

朝の二コース番組『おはよつどいじょ』。番組のコーナーの一つである星座占いで今日の宗一郎の運勢は最下位だつた。

「へえ、中々面白いね、占ひつて」

そこに食いついてきたのが、天子だ。

「ちょっと僕も、占ひつてヤツをやつてみよつかな」

その後、テレビに向かつて差し出した天子の手から眩い光が放たれ、目を開けてみると、居間のテレビは忽然と姿を消していた。

天子いわく、今日一日のテレビの存在を明日に送つてしまつたとか。

つまり天子は「今日運勢が悪いのなら、その存在と結果を明日に送つてしまえばいい」と思つたらしい。

テレビを飛ばしても今日の運勢は変わらないわけで、出来れば占い師かテレビ局を明日に送つてほしかつた。もつとも、それが本当に行わっていたら、大惨事ではあるが。

・・・

登校を急ぐ宗一郎の手のひらの上で、携帯電話に腰かけ小悪魔のように笑う天子を見て、宗一郎はふと、昨日の疑問を口にすることにした。

「なあ、天子」

「なんだい？」

「その、本来宿るべき場所 神具に宿る方法が解つたら、どうするんだ」

それを口にしないことは、いつのまにか二人の間では暗黙のルールとなっていた。

初めこそ間違つて宿つてしまい、動搖していた天子だが、今では神具に戻ろうとしている様子が全く見られない。

でも、彼女は神様だ。個人の感情を優先することよりも、信仰を集め、人々を平等に守らなければならないという責務せきむがある。

本心と責務。

きっとその二つが、天子の小さな身体の中でせめぎあつてているのだろう。

しかし、このまま有耶無耶すむやにしてズルズルと月日を重ねるのは、宗一郎にとつては辛かつた。

朝、目覚めたら唐突に天子がいなくなつていた、なんてことはごめんだった。

かといって、天子が本来宿るべき刀へ宿るというのならば、それは神の義務ぎむであり、彼女の意思もある。

一介の人間である宗一郎に、彼女を引き止めることなどできない。

だから宗一郎は、天子の本当の気持ちが知りたかった。

「僕は 、僕は神様だ」

その言葉を聞いた瞬間、宗一郎の身体は石のように重く、硬くなつてしまつた。

期待していた何かが、どうしようもないものだと知つてしまつた。邪魔だな。そんな眼を向けられながら、両脇を人がすり抜けて

いく。

川の流れを塞ぐ岩のように、彼は動かない。

宗一郎の頭の中は言い知れない不安、恐怖が暴れまわっていた。

そうだ、彼女は神様なのだ。

人間が神様を愛する？ 人間風情が？

おこがましいな。

熱を持つていた宗一郎の胸が、徐々に冷めていく。
それとは対照的に、着物の袖をもじもじとさせて、うわめづか上目遣いで宗一郎を見上げる天子。

「でも、でもね。僕は、キミのことが……」

一生懸命伝えようとして口を開くが、それでも、言葉を選んでい
るような顔だった。

そんな天子の双眸の奥に隠れた、黒い瞳孔すみこが動き出した。
可愛らしい表情に、刀のような鋭さが混じる。

「うわ……何あれ」「落ちるぞおー！…」

周りを歩く数人が、ビルの建設現場の上に向かい叫んでいた

漆 『ハハハ、ハハ』前編（後書き）

神様と人間。

交わることのない二つの存在が胸襟を開いたとき、彼らの上から
降り注ぐ一つの答え

次回『ハハハ、ハハ』中編
どうぞ、ご期待あれ。

ふあん。

空を見上げると、自分の何十倍もの大きさをした鉄骨が、宗一郎に向かって一直線に落ちてくる。

「逃げて！」

天子の声で我に返ると、鉄骨は宗一郎の目前まで迫っていた。動けない。あまりの現実離れした出来事に、宗一郎の足は動かなかつた。

「間に合え　　！！」

天子は空へと両手をかざした。

一瞬にして周囲が灰色へと塗り変わる。

鉄骨と共に落ちてくる砂埃が停止ボタンを押したかのように静止する。

動くもの全ては景色に縫い付けられた。

だが、鉄骨は落下をやめない。

天子は眉をひそめると、何かの印を描いた。

宗一郎の頭上に、水のような波紋が広がっていく。バリア、といふやつだろうか。

「ふ　　ぐうううううつ！！」

鉄骨と波紋とが衝突する。広がる波紋が揺らぎ、耳をつんざくような破碎音が響き、足元のアスファルトはひび割れていく。

「はは……やつてくれるなあ。えらい神もいたもんだね」

天子を見やると、少し辛そうに、口元を歪めていた。

「神……？」

「キミ、まさかとは思うけど……このお守りを買った神社で、何か罰当たりなことしたかい？ 例えば　　鳥居に小水をかけたとか」

「バ、バカ！ そんなことするわけないだろ。ただ、お御籤を引いたら大凶が出て、カツとなつて捨てた……」

「ハハ、神の有難いお告げを捨てるなんて でもさ、流石にこれ
は少しやり過ぎなんじゃ ないかなあ！！」

ググ、と少しだけ鉄骨が押し戻されていく。それに連れて、天子
は口調を荒げた。

「いいかい？ 人間がお告げを捨てたからってさ、神だつて、やつ
ていいことと、やつちゃいけないことがあるのさ！ でもね、人間
も悪いんだよ」

チラリと宗一郎を見る。

「人間はさ、大して信仰もしないくせに、いざとなつたら神頼みす
るんだ。ひどいと思わないかい？」

天子の言葉を聞いて、宗一郎は何も言えなかつた。
なんで守つてくれないんだ、神様の嘘吐き。

そうやつて悪いことにあたると、いつも神様のせいにしてきた。
そのくせ、自分ではどうにもならないことが起きると、決まって
神様に救いを求める。

まさに、宗一郎自身ではないか。

「でも、僕は人間が好きだ！ 例え罰当たりな行為を犯したとして
も、無慈悲に殺そうとする神なんて、僕はなりたくもない！！」

天子はまつすぐな瞳で、鉄骨へと訴えかけている。

もしかしたら彼女は、自分が罰当たりをした天ヶ先神社の神様と話
しているのか。

宗一郎は天子が睨んでいる方へと視線を向ける。

もしあそこに神様がいるとするならば、自分の声も聞こえるかも
知れない

捌 『ハハハ、ハハ』中編（後書き）

宗一郎は、自らの行いで天罰を招いてしまった。しかし、傍らで叫ぶ神は、天罰に抗おうとする。神と神がぶつかり合うとき、無力な人間の宗一郎にできることは、ただ一つだった

次回『ハハハ、ハハ』後編
どうぞ、ご期待あれ。

「あ、あのさ！」

激しくぶつかり合つ鉄骨と波紋の轟音で、宗一郎の声は今にも搖かき消えそうだつた。

それでも、宗一郎は腹に入れる。

「俺、誤解してた！ 神様つて、いつも氣まぐれにしか助けてくれないとつってた、肝心なときに守つてくれない意地悪なヤツだと思つてた」

「キミ……」

「でも、今は違う。天子と出合つてから、こんな神様もいるんだつて、気づいたんだ。その、本当に 申し訳ございませんでしたあ！」

なんで鉄骨に頭を下げるのか、自分にもよく解らなかつた。でも、自分が悪いと思つたら謝るべきだと、そのとき宗一郎は思つた。

ぐぐ。

ぶつかり合つ音が唐突に消え、鉄骨がコマ送りのように、ゆっくりと宗一郎の脇をすり抜けて、地上に落ちた。

「ふふ、やつた……ね」

言い終えて、携帯電話の上に倒れる天子。

それは重さを感じさせない動きだつた。

同時に周りは色を取り戻していく。

時間が動き出したことにより、土煙が上がり、破壊されたアスファルトの破片が飛ぶ。

宗一郎の頬や手足に少しばかり痛みが走るが、そんなことは気にもならなかつた。

「天子 ？」

「ハハ……神を説得した気分はどうだい？ いやあ 激かつたね

え。あの顔、見たかい？　いや、キミにはあの神自体、見えなかつたか」

空を見上げて、思い出したように笑う。

「こんな神、か。ひどいなあ、僕はそんなに変な神だつたかい」

そうだ。こいつは変な神様だ。

急に人のお守りに宿つてきたかと思つたら、携帯電話を壊しやがつて。

しかも勝手に居候になつたと思つたら、自分の家のようにくつろいで、お腹が減つたからポテトチップスが食べたいとか、イチゴ・オレを飲みたいとか、あげくの果てにはテレビが見たいとかわがままばつかり言い始めて……今朝なんてテレビそのものを消してしまつた。

「キミ、ちょっとといいかい？」

弱々しい声が、宗一郎を我に返す。

「僕の身体を、携帯電話から離してもらえる、かな」

水を掬い上げるように、倒れている天子を両手で包み込む。

お守りから離れても、以前のように火花が散ることは無かつた。

「やっぱりね……もう、制約は解かれたか。こいつことは あら

ら」

僅かに、天子の身体が色を失つてゆく。天子の身体が透け始めた。それに気づいた天子は、自分の手のひらを見つめて肩をすくめる。「どうやら、加護の力を使いすぎたようだね……自分の身体まで維持できないみたい。いやあ、笑っちゃうなあ」

まるで他人事のように笑う。右腕を顔に乗せて両目を隠すと、ふうと一息吐く。

「死んじやうのかな」

その言葉に、宗一郎の胸が熱くなる。

天子が死ぬ？

天子がいなくなる？

それは、天子が宿るべき場所に宿る、ということよりも、遙かに

辛いことだった。

死ぬということは、もう一度と会えないということなのだ。

「嘘だろ?」

「さあ 解らない。死ぬとか死なないとか、考えたことなかつたよ」

神様が死ぬ、なんて考えられるわけもない。

「まあ……ほら、いろいろ楽しかったよ？ 僕はキミと出合えてよかつた。だから僕は悲しくないよ」

宗一郎は、それに聞き覚えがあった。昨日見ていたドラマの最終回にあつた、友人が主人公の前で別れを告げるときのセリフだった。

「じゃあ、何でそんな悲しそうな顔をするんだよ」

「おや、本當かい……やだなあ、女の子の泣き顔なんて見るもんじやないよ」

隠していた手が完全に消えていて、天子の顔が露になっていた。

顔は涙でぐしゃぐしゃになつており、瞳は赤く腫れている。

「しかし、キミも酷い顔だなあ。ハハハ」

きっと、凄い顔をしているんだと思う。天子につられて、宗一郎も笑つた。

「ハハハハハ

「ハハハ、ハハ」

笑ううちに、天子の身体はどんどんと薄くなつていつた。

「ハハハ、ハハ」

そして、宗一郎の笑い声だけが土煙つちけむりの中で木霊していた。

玖　『ハハハ、ハハ』後編（後書き）

自らの過ちに気づき、頭を下げる宗一郎。神の怒りは静まるが、守りたかつた存在は手の中から消え失せていく。彼女の生きた証し「お守り」を握りしめ、彼はまた一人の夜を送る

次回『悲しみの一夜』
どうぞ、ご期待あれ。

拾『哀しみの一夜』

「コツチ、コツチ。

その夜、宗一郎はベッドの上で布団を被つて丸くなつていた。
時計をぼんやりと見つめているが、一秒一秒がとてつもなく早く
感じる。

もつと遅くなれ。もつと、考えさせてくれ。

コツチ、コツチ。

秒針は情け容赦なく、規則的に時を刻んでゆく。

天子、天子、天子。頭の中は天子でいっぱいだつた。
自分は本当に天子が好きだつたんだと、宗一郎は確信する。
我ながら、気づくのが遅かつた。

最初はただ氣の毒で、捨てられた子犬のようで可愛かつたから、
とりあえず面倒を見ていた。神様のくせに好奇心の塊じゅうきしんのかたまりで、あれはな
に、これはなに、とうるさかつた。

そのうるさいヤツはいなくなり、今はとても静かだ。
また、ぽつかりと心に穴が開いたように感じる。

再び、大切な友人を失つた。

でも、この気持ちは友人を失くしたときよりも悲しい。

「なんで俺なんか助けたんだ。バカ野郎。こんなバカで友達もいな
い、どうしようもない俺を助けて死にやがつて」
会いたい。

「俺を一人ぼっちにさせやがつて　」

また、天子に会いたい。

拾 『哀しみの一夜』（後書き）

慟哭の夜を過ぎした宗一郎。
携帯の上で寝息を立てていた、小さな神様はもういない。
昨日までの日は夢か現か、失意の彼を迎えたのは朝の陽射しだつた

次回、最終回『ぱわああっぷ』
どうぞ、じっくり期待あれ。

終『ぱわああつぶ』

宗一郎は、瞼を涙でいつぱいにして朝を迎えた。

寝ている間も泣いていたようで、枕を涙で濡らすといつ葉を地じで行くような惨状さんじょうだつた。

どうやら、珍しく目覚まし時計の時刻よりも早めに起きてしまつたらしたらしい。

あの日と同じように。

チラリ、と脇に置かれた携帯電話を見やる。

あの日、スヤスヤと寝ていた天子。

いつも起きたら、気持ちよさそうに寝ていた天子。

今は、携帯電話の上には誰もいない。

「バカ

また、今日から独りだ。

そうだ。友人と喧嘩けんか別れをしてからずっと独りだつたじゃないか。それにこれは、元々ただのお守りだつたんだ。

宗一郎は自分自身に言い聞かせた。

そう、ただのお守りだつたじゃないか。

しかし、お守りを見るだけで心臓を驚撃わしづかにされたような苦しみが湧き上がつてくる。

宗一郎は携帯電話を手に取ると、お守りを外した。

「俺は、お前のことが、好きだつた。今さらだけど、『めんな。恥ずかしくて……ずっと言えなかつた』

今は寂しい独り言だ。

宗一郎はお守りをベッドに置くと、扉のノブに手をかける。

「ハ、ハハ

少し、あきれた様な声が背中に投げかけられる。

「いやあ全く キミは歯の浮くようなセリフをよく言えたものだね。見ておくれよ……ホラ、僕の顔が真つ赤じゃないか」

ゆっくりと、宗一郎は振り返る。

流れるようなピンク色の長髪に、亞麻色の瞳。

そして携帯電話より一回り大きい背丈になっていた。

それがお守りの上で、照れくさそうに頭を搔いていた。

宗一郎は、それが天子だとすぐに解った。

「天子　？」

「また、会えたね……ソウイチロウ」

照れくさそうに、頬を搔く天子。

「なんで……」

「ソウイチロウが、僕のことを信仰

想つてくれたからさ」

天子は、ゆっくりと語り始めた。

信仰は神を想う心ということ、加護の力は信仰心から生まれること。

広く知られた神ならば、自然と信仰心は高められ、加護の力は強大となる。

しかし、生まれたばかりの天子を知っている人間は宗一郎しかいなかつた。だから、加護の力はとても弱いものであり、鉄骨が落ちてきただときに、加護の力を使い果たしてしまつたといふ。

しかし、天子が消えてからも、信仰心は途絶えることはなかつた。むしろ、強まつたといふ。

「暗闇の中で、ずっとキミの心を感じたよ。その、好きだとか、会いたい、とか」

宗一郎の顔が沸騰したやかんのようになり、熱を帯びる。

天子は続けた。

「それでね、その信仰心のおかげで僕の神階を上げてもらえることになつたんだ。だから僕が持つ加護の力は、より強いものとなつてまた「」に戻つてこれたんだ」

お守りからふわり、と浮かび上がり、宗一郎の目の前に近づく。それは息がかかるような距離だつた。

「それに、もうお守りの制約は受けないんだ。だから、お守りから

離れてもよくなつたんだ

じゃあ もう、ここにいなくてもいいんだな。

そんな言葉が出そうになる。

その前に、天子は少し照れくさそうに、宗一郎に告げた。
「でも……今度は、キミに宿つちゃつたみたい なんだ」
時が止まつたように感じた。

「天子が、俺に？」

思わず聞き返してしまつ。

恥ずかしそうに、天子は頷く。

「ソウイチロウの心がね、空っぽになつてたんだ。このままじゃ、
ソウイチロウは人間としては生きていけなくなりそうだつた」
「だから……？」

「うん。ただし、今度はソウイチロウから離れられなくなつちゃつ
たけどね……あ、違うんだ！ これは決してその、離れたくないつ
ていう訳じやないんだよ。離れ、られないんだからね」
いやだなあ、もう……。手をパタパタと振り、火照る身体を冷や
そうとする天子。

「じゃあ、さ。これから ずっと、一緒にいられるのか？」
「当然じやないか。もう、ずっと一緒になんだよ。離れられ ない
んだからね」

てへへ、えへへ。

天子と宗一郎は互いの顔を見合させ、笑つた。

天子を見つめて、宗一郎は確信した。

自分にはこいつがいないと駄目なんだ。

と、天子の後ろにある時計が視界に入る。そして宗一郎の顔がみ
るみる青ざめていく。

目覚まし時計のアラームがセットされていなかつたようで、短針
は既に八時を指していた。遅刻は確実である。

「うわ、やばい遅刻する！ ていうか遅刻確定だよ！…」

「なんだつて。それはまずい……ソウイチロウ、足を出してくれ。

隼よりも速くなるよつこ、僕のぱわああつぶした加護の力をかけてあげるよ！」

「やめろー。俺の脚だけが先に学校へ着いてそだから おわ、テレビが一台あるー？ 昨日の占いで、今日へ送られたテレビか！ 邪魔くさいー！」

勢い良く家を飛び出していく宗一郎。

こんなに騒がしく登校するのは、初めてだ。

天子に会う前は、本当に何もかもが冷めていた。何も感じずに、全てがどうでもいいと思っていた。だが、今は少し違うような気がした。

心に暖かいものを感じる。

これは、自分の胸に宿る、天子の温もりなのだろうか。

宗一郎は、駅へと駆けていく。

天子と、共に。

終　『ぱわああつぶ』（後書き）

天子と宗一郎。二人の笑いあつ未来を書き終えた、作り手『虎太郎』。

「漫画のネームとゲームシナリオと、投稿用のスケジュールがかつかつだ……息抜きがしたい」

彼が思いついたのは、既に書き終えた『おまもりやどり』のあとがきを書くことだった

次回『あとがき』
どうぞ、ご期待 しなくてもいいです。

余『あとがき』

この度は『おまもりやじり』をじっくり愛読していただき、ありがとうございます。
御座います。

小さな神様が起こしたお話、如何でしたでしょうか？

読んでいただいたみなさまが、ほっこりと和み、本作を読んだことで、まだまだ明るい未来があるのだ、と知つてもらうために作りました。

人生で初めて、読者を意識して書いた作品です。

・作られた経緯

この作品は『150000文字程度』という決まりの中で作られたものです。

展開等、ライトノベルとしてはかつてないほどの短さで、うまく纏める必要があり、大変苦労した覚えがあります。

しかし、天子の魅力もあってか、無事に優秀作品の枠に入ることが出来ました。

下手な小細工はなしにして、愚直なほどの、王道的な展開。それが好評でした。

・天子

この国、日本に生まれながらにして、古より我が国を守つてくださっている、神様たち。

聞けば堅苦しいですが、そんな神様たちをポップに、より親しみやすくなかったいと思いながら書いた結果、可愛らしい神様が生まれました。

今にして思えば、親しみやすいといつが、危なつかしくて目が離せないといつが……。

・何故、天子がピンク色の髪になつたのか

本作を書き終えた後、私はY先生に誤字脱字などを見てもらいました。

すると「そういえばさ。虎太郎君さ、天子は『ぱわああつپ』しだけど、外観的には何も変わらないの?」と言われました。「うんとですね」と返答に困つていると

「髪の色変えたら?」と言われ、「なるほど~。じゃあ、そうしてみます」と、私も作りこみの甘さを実感しました。

そのため、『身長がちょっと大きくなつた』のと『髪の色が変化した』という変化をつけました。

ですが、他の先輩達に見せた中で「生まれ変わつて髪がピンクになる理由が解りません。これ、必要ですか?」

と指摘されました。「まあ、遊び要素として……ぱわああつپしたという証明として……」なんて濁しききました。

すると、そのやり取りを聞いていたY先生が「そうだよね。何で、髪をピンクにしたの?」と口を挟まれました。

「せんせーが言つたんでしょう!『ぱわああつپ』したことを解りやすくするために、髪の色変えたり、とか!」

といつ、コントみたいなやりとりで生まれたものでした。でも意外と、ピンクに巫女服つて呑つんですよ……?

・似てるアニメ

「Jの作品を書いた後に「夏目友人帳を見たか?」と友人に言われました。聞けば、おまもりやどりと設定が似てているなどで「いつかい見てみろ!」と急かされます。詳しく聞いてみた感じだと、私のほうが異端というか、神様らしくないというか……。機会があれば、見てみたいと思っています。

・タグの「おっさんが三人泣いた」の真相

「Jのサイトに掲載する前に、数十人の人に見てもらいましたが、中でも極めつけは四十を越えた三人のおじさんから「ほろりときた」「王道すぎて泣いた」と言われたことです。なんてコメントすればいいのか、困りました。

泣いたというのも、おっさんらからすれば、ライトノベルを見たことが無いので、その反動もあってのことなのでしょう。

・今後について

本編はこれで終わりとなります。

あとがきを掲載した翌日より、執筆済みの番外編『ヘップバーン』及び『できること、できないこと』を掲載していきます。
予約掲載となるため、毎日十八時ぴったりに、更新します。
引き続き、天子と宗一郎の物語をお楽しみください。

『おまもりやどり』本編を連載している間、たくさんの感想をいただき、本当にありがとうございました。一人一人の声を耳にすることができ、また返信することが、いつの間にか私の生活のうちの一

つとなっていました。

こういふことが、作家になるにあたり大切なのだな、と感じました。

そのほかにも感想、レビューなどいただけると、今後の執筆の励みになります。

お気軽にお送り下さるませ、お待ちしています。

それでは、失礼します。

虎太郎でした。

（「・・）「ガオー

ヘップバーン？

八月も中盤に差し掛かり、外ではセミが近所迷惑級の騒音を発していた。

夜の街に現れる暴走族よりも、今はセミを検挙して欲しい、と宗一郎は考えていた。

そして、部屋の中ではふわふわと視界のあちらこちらで、何かが浮いていた。

ど、整頓された本棚の横を、半透明の猫の生首が横切る。生首の根元はこいのぼりのしつぽのよう、ひらひらと青白い尾を引いていた。

机の上では猫じやらしのようなものが、終始のた打ち回っていた。おそらく犬のしつぽだろうと、宗一郎は冷静に考える。

その他もろもろ、似たり寄つたりのものが無音で、宗一郎の部屋を縦横無尽に泳いでいるのだ。

生首だけの猫が大きなあぐびをする。

またあいつの仕業か。

そのまま猫を目で追いつと、空中に浮いているちいさな女の子がいた。

ピンク色の長髪に巫女装束。身長は十センチといったところか。宙吊りの状態で、手足は水の上に浮く水死体のように力なく垂れ下がっている。

すんすんと宙吊りの巫女服へ近づく。

「おいら天子」

むんず、と着物の襟を掴むと小刻みに揺さぶった。

んあんあと悲鳴を漏らして、それ

天子は目を覚ます。

「やあ……」さげんようソウイチロウ。朝っぱらからびつしたんだ

い
まぶた
瞼を擦り、天子はなんとか起床した。

「（イ）きげんよう天子……で、一体あれは何だ」
気持ち良さそうに遊泳している生首を指さす。

「猫だねえ」

「確かに 見ま（イ）う事なき猫の首だ。じゃあ、あれはなんだ」
机の上の、活きのいいしつぽに指を向ける。

「犬だねえ」

「確かに どこからどう見ても犬のしつぽだ。しかし、だ」
たつぶりと間を空けてから、天子に問い詰める。

「こいつらは 一体何なんだ」

ううんと唸り、天子は小さな口で大あぐびをする。

「起きてすぐに質問かい……？ ちょっと一息つかせてくれないかな」

ヘップバーン？（後書き）

小さな神様が戻ってきて、数週間。

全ての出来事がいい思い出となるという矢先、宗一郎を日常を齎
かしたのは謎の浮遊体たちだった。

しかたなく、宗一郎は問うことにした。

浮遊体と一緒になつて、部屋をただよう神様の天子に

次回『ヘップバーン？』
どうぞ、ご期待あれ。

ヘッドバーン？

「ああー、生き返るうー

まま」と用の湯のみをぐいっと傾け、心底美味つまそうにお茶を飲む

天子。

「そうか、それは良かつた。とりあえず本題に入るが、この空を泳いでるのは一体何なんだ？」

二人の頭上を行きかう生首と、その他諸々。

天子は部屋を見回して数秒、眉間に皺しわを寄せ「あー」とつぶやく。

「あれはね、幽靈だよ」

はい説明終わり、と言わんばかりに言葉を切り、お茶を啜る。ズズズ。

数秒間、その音が部屋の中を支配した。

「あー、そつか

「うん、そつ

ズズズ。

「つて、何のん気にお茶啜すすつてるんだ！ 幽靈だぞ幽靈！？」

「あ、いや。ほとんどが動物靈だし、特に害はないよ」

猫の生首を見やると、動かなくなつたしつぽに近づいて行き……

鼻を近づけると、見計らつたかのようなタイミングでしつぽが跳ねる。

鳩が豆鉄砲を食らつたような顔をして、生首は明後日あさひの方向へ飛んでいった。

「あんなの見てたら、俺の気分が害されるんだが」

学校から帰ってきて、しつぽが机の上で跳ね回つていて。

電氣を消して布団に入り、暗闇の中を生首が彷徨さまよつていて。

田を覚ますと、幽靈たちが我がもの顔でたゆたつていて。嫌だ。そんな部屋は嫌だ。絶対に落ち着かない。

宗一郎はがっくりと肩を落とした。

「元々ねー、僕がソウイチロウと出会ったときからいたんだよね、あの子たち。でもソウイチロウは気にしてなかつたし、そのまま放置してたんだ」

「いたのか……」

「僕がソウイチロウに宿つたから、見えるよになつたんじやないかな。ま、見えて悪いことはないからさ」

と、天子は再び元気になつたしつぽを指さす。

「あれが毘沙門天でねー、さつきのが無賴迅^{ぶらいじん}」

「名前付けてたのか！」

「で、あそこにいるのがミズ・ヘップバーン」

天子が示す方を見ると、そこには一つの火の玉が浮いていた。

一目見ただけで百人中百人が人魂^{ひとだま}と言うであらう、典型的な形の火の玉だつた

ヘップバーン？（後書き）

部屋をたゆたうものは動物靈である、と告げられた宗一郎。神様の言つことだからと信じる最中、一際おかしな靈を見つける。ろうそくに灯る炎ように、その身を狂おしくよじらせる。その名はヘップバーン。かの有名な女優の名前だった

次回『ヘップバーン？』
どうぞ、じい期待あれっ。

ヘップバーン？

手のひら程の青白い炎が、空中でメラメラと燃えている。

「ヘップバーン　外人か！？」

「だつて、そう言つてるんだもん」

「あの火の玉がか！」

「うん。ねー、ヘップバーン」

気のせいか、頷いたように炎が揺らめく。

「言葉、通じるのか？」

「うん。死んだ人の声は魂から発せられるんだ。それを『死者の聲』こゑといつてね、僕たちは意思の疎通そつうという形で話せるんだよ」
一体どこからきたのか、なんの目的があつて俺の部屋に来たのか。宗一郎はくらげの様に泳ぐ火の玉を凝視する。

「へー、若いころはオードリー・ヘップバーンつて人に似てたんだあ？……え、やだなあもう」

天子は宗一郎そつちのけで火の玉と話していた。

どうやら天子は幽靈と話ができるらしい　おそらく、神様だからだろう。もしかしたら、自分には火の玉でも、天子には生前の姿が見えているのかもしれないなあ、などと考える。

「ふんふん。セミ？　へー……あ、いいね！　その作戦でおやつでも食べようか」

「一体、なんの話だ？」

天子は、ちらちらと宗一郎を見て、笑いをこらえている様子。なんだよ。

そう言つと、くつくと悪役が秘密道具を出すかのように、天子は怪しく笑つた。

「あのさ、ソウイチロウつて苦手なんでしょ。セミが」

「え……あ　」

瞬間、身体を巡る血が逆流したかのように、ゾゾゾと戦慄せんりつが走つ

た。

何で知つてゐるんだ。そもそも、知つてぢりする氣だ。

不安が背中を這はは、全身がむず痒くなる。

「なんで、それ、を」

「まあいいじゃないか。それよりも、僕は起きたばかりで、お腹がすいたなあ」

空中に浮く天子は、宗一郎を見下ろしながら言つた。

「あまいもの、たべたいなあ

かこひくわじんしゃ

獲物を前に舌なめずりする快楽殺人者の如く、ゆつくつと宣告する。

「『つまや』のしゅつくりいむ、ほしいなあ」

つま屋のシュークリーム。それは頬が落ちるほど美味い。舌に絡みつく濃厚な風味のカスタードクリームは上品な甘さで、一度でも口にしたら誰だってとつこになつてしまつ一品。宗一郎の大好物でもあつた。

以前、犬のようにおねだりする、ワンワンと吼えるように、欲しい欲しいとわめいた天子に一口食べさせてあげたことがあつた。

「もちろん、へつぱーんのぶんもね」

じゃないと、ソウイチロウが寝てるとき、布団の中にセミを入れちゃうよ。

幻聴げんちょが聞こえたような気がした。

見えない力に背中を押され、宗一郎はすぐに家を飛び出したのだった。

ヘッブバーン？（後書き）

生前の姿が、かの女優に似ているからと自称する人魂『ヘッブバーン』。

天子のいたずらも重なり、断腸の思いで、貢物の買いだしに遣わされてしまった。

宗一郎の財布事情や如何に

次回『ヘッブバーン？』
どうぞ、ご期待あれ。

ヘップバーン？

「おいしいねええ～
もつきゅ もつきゅ。

まるでこの世の全てを手に入れたかのような笑顔で、天子はショークリームを豪張っていた。

背丈の関係上、天子より一回り小さなショークリームだが、食べる姿はチーズをかじるネズミのようだった。口の周りいっぱいにつけたカラスター・ド・クリームをなめ取る姿は、実に愛らしい光景である。しかし今の宗一郎には、それが憎らしくてしようがない。

親の仕送りに頼るしかない貧乏学生の宗一郎。

財布の中には七百円しかなかつた。ちなみに、うま屋のショークリームは三百円。仕送りは月末であり、社会人であろうと学生であろうと、収入が入る前は金欠ぎみになつてているわけで。

一つ買つたら百円しか残らない。

勇気あるファッショントメディアン、ジョーカー神様め……！

今に見ている。じつくり可愛がつてやる その笑顔を奪つて、泣いたり笑つたり出来なくしてやる……

なげなしの金をカツアゲされた拳句、手足を縛られ、大好物のショークリームを鼻先にぶら下げる氣分だ。

宗一郎の心の中は、魔女が煮立てる釜の中身のよつた感情がふつと沸いていた。

俗にいう、怒りというものである。

そんな宗一郎を尻目に、会話が盛り上がる天子と火の玉。

何とも言えない疎外感から、煮えていた怒りも徐々に冷めていく。こうなるといじけた子供のように、ベッドに寝転がつて一人漫画を読み始めるだった

ヘッブバーン？（後書き）

ついに不貞寝同然に、宗一郎は暴君天子にそっぽを向いてしまう。だがしかし、無邪気に微笑む天子を見ると、未だ知らない一面を垣間見たと、胸が脈打つ。

そんな宗一郎を尻目に、天子と人魂の会話は盛り上がりしていくのだった

次回『ヘッブバーン？』
どうぞ、ご期待あれ。

ヘップバーン？

「え……やだなあ、もう ヘップバーンたらあ！ そんなことないよう」

しかし不思議だな、と宗一郎は思う。自分以外に話し相手がいなかつた天子が、今は他人……火の玉と楽しそうに喋つている。こうして考へると、それはそれで喜ばしいことであつた。

「うん、うん……え、もう行つちゃうの？ あーそつか……うん、わかつた ソウイチロウ、ヘップバーン帰つちゃうんだつて」天子は向き直り、宗一郎に告げた。

その顔は「まだ遊びたい」と言いたげな小学生のようだつた。ゆつくりと浮き上がり、窓を通り抜けて火の玉は去つていつた。皿に載つたままのショーケリームを残して。

「あれ、ヘップバーン食べなかつたのか？」

「うん。幽靈つていうのはね、食べ物や飲み物を直接口には出来ないんだ。だから、湯気や冷氣、匂いを食べて満腹になるんだよ」ふーん、と関心していると、天子は宗一郎を見上げ微笑ほほえんだ。「だからさ、残つてることはソウイチロウの分。好きなんでしょ、ショーケリーム」

先程の憎しみも怒りも、その笑顔で消し飛んでしまつた。

「ああ……その、ありがとな」

氣恥ずかしくなり、宗一郎はそそくさとショーケリームを口に運ぶ。

一口、ショーケリームのカスタードが舌の上を転がり そこで違和感を感じた。

「天子。あのさ、これ味無いんだけど」「どうやら味あじの氣きも食べちゃつたみたい」まさに味氣あじけが無い、とはこのことだ。

このままでは生殺しではないか。

明日は親からの振り込みがあるため、銀行に寄つてから買いなおしてこようかな、と思つた宗一郎は、自分と天子以外に、もう一人シュークリームが好きな人のことを思い出した。

ヘップバーン？（後書き）

自腹をきつたシュークリームを口に入れたものの、無味という痛い思いをしてしまった宗一郎。

天子の無邪気なダジャレも意に介さず、宗一郎はただ、胃に流し込んだ。

そして、今度こそ美味であるシュークリームを食すべく、買い物へ出かける。

自分と天子と、大切な人のために

次回、最終話『ヘップバーン？』
どうぞ、ご期待あれっ。

ヘップバーン？

翌日。

もつときゅ もつときゅ。

「おいしいねええ～」

一日連續でシュークリームをほお張る天子は、幸せに浸っていた。
少し離れた場所で宗一郎は、小さな仏壇を開いた。
そこに買つたばかりのシュークリームを皿に載せて置き、線香を立てる。

「ソウイチロウ、その仏壇ビjurしたのさ」

「いやな、こっちの学校に来るときの引越しでゴタゴタしちやつて
てさ。両親は海外で外交官してて家にいないしさ、俺があげなくち
や可哀相じやん」

手のひらを合わせて、心を真っ白にする。静かに冥福を祈る。

「天子、ひとつ手を合わせてやってくれないか。神様に祈つてもら
うんだ、きっと喜ぶわ」

「うん。それでは早速

と、仏壇の写真を見て、ぱあっと天子は笑顔を咲かせた。

「どうした？」

「ヘップバーンだ！」

仏壇には、老人とは思えない元気いっぱいに笑う祖母がそこにあ
つた。

今日は八月も中頃なかい、お盆の時期である。

ヘップバーン？（後書き）

ようやく番外編も終え、一息ついた虎太郎。

「ふう……色々あつたけど、楽しかったな。やっぱ、小説を書いて良かつた」

あふれ出す感情の噴流は留まるところを知らず、ついには、再び『あること』を思い立つてしまう。

「もう一度、感想書いて、息抜きしたいなあ」

作者気取りの虎太郎は、再びあとがきの作成に取り掛かった。誰も期待していない、どうでもいい長文の執筆に

次回『あとがき』

どうぞ、哀れんでくださいませ。

『あとがき』

『おまもじやぢつ』の番外編である『ベップバーン』を最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

この物語は、天子がぱわああつふしてから数週間後のお話です。え、季節は八月だったのか、ですか？

個人的には七月中盤あたりが本編のラストだったと考えています（え

本編と違い、文字制限がなかつたために、こうして余計な描写が出てきて、読者様を混乱させる結果となつてしまつたことに関して、本当に申し訳なく思つています。

ただ、一つ解つたことは 文字制限のしばりがあつても、なくとも、作品を書く楽しさは何も変わりませんでした。

・天子と仏壇

まだ神道に詳しく述べなかつた頃に書いたので、仏教と神道が入り混じつたお話となつてしまつました。神道の神様と仏壇のコラボレーション……異質すぎて、逆に斬新に思えてきました。

ちなみに、お盆は仏教のイメージが強いですが、もとは神道の考えだとされています。

神道は祖靈^{それい}信仰や御靈^{みたま}信仰が基盤であり、古神道^{こじんとう}と仏教の盂蘭盆^{おはらぼん}が習合したものが、現在のお盆とされているそうです。

ピンク色の髪事件で出てきたＹ先生は仏教派なので「これぞ、仏教じゃん」なんて突つ込まれましたが、上記にあることを述べて、突つ込み返してやりました。

「なんだ。僕はさ、大仏が好きなだけだから」

そんなこといつたら、私だってただの神様好きなだけですから…

…。

いまだに、こういった盆のあやふやな部分が神仏習合の名残なんですね。

ちょっとぴり、悲しいです。

・ヘップバーン

ヘップバーンのモデルは、数年前に亡くなった祖母です。亡くなる間際、目も当てられないほど苦しそうにしていましたが、お葬式の場で会ったときには、安らかな顔をしていました。私たち家族はお金が無いので墓を立てていながら、未だ心残りです。

・祖母のこと

私は、そのころ仕事もしていて大変、精神的に辛い時期にありました。祖母は亡くなるちょっと前に祖父と離婚し、身よりもありませんでした。

ですので、長女である母が面倒を見るということ、私の家にやつてきました。

苦しそうにいつも居間のソファーで寝ている反面、いつも祖母がいるということで、家で寛ぐことができずに、イライラとしてしまいました。

病院に入院する直前、一人きりになつたときに、ソファーに横たわる祖母は、私を見上げて「ごめんねえ、虎太郎君。迷惑かけて、ごめんねえ……」と謝つきました。

それがまた、私の心を見透かしているよう、「重々承知していることなのに、言葉にされたことについて……

「そう思つてゐるなら、ひとつととこなくなつてくれ」

と、言つてしましました。

そのあとに、申し訳なさそうに謝る祖母の言葉が、今でも耳から離れません。

しばらくして様態が急変し、入院してから数週間後に祖母が亡くなりました。

祖母の遺体を田の前にしたとき、よつやく「もう一度と、祖母に『あのひと』を謝ることはできないんだ」と解りました。

祖母の遺体の前で、何度も何度も、泣きながら謝ったのを覚えてます。

もう謝つても、許しても「ひづ」となんて、絶対にないんだなあと実感しました。

葬式が終わつてから数カ月後、祖母の地元に住む親戚の下に、たくさんの祖母の知り合いが訪れました。

そして、祖母の生前の姿が映つているビデオテープを持ってきて、みんなで見たそうです。

祖母は、とても活発で身体を張つて笑いを取る人でした。

年甲斐も無く、レイザーラモンHGの衣装を纏つてものまねしてみたり……たくさんの知り合いが「あの人は、本当に太陽のようないだつた」と口々に言つしていました。

私は、そんな祖母に酷い言葉を吐いた自分が許せず、そして祖母への、私から出来る最大の手向けとして、この作品を書くことにしました。

私はとんでもないバカなので、できる」といえば小説を書くことくらいしか、できませんので。

祖母は、常世でも元氣でいるでしょうかね。

早くプロになつて、私の名前が常世に届くよう、頑張らないとい

けませんね。

そうすれば、祖母むかの作品に気がこってくれる」とひどしう。

また、感想、レビューなどいただけると、今後の執筆の励みになります。

お気軽にお送り下さるませ。

お待ちしています。

それでは、じばしのお別れのあと『どちらも』と、『できない』と『』でお会いしましよう。

虎太郎でした。

(「・・）「ガオー

できる」と、できない」と?

「イヌが欲しい！」

もし、子供がこんなことを言つたら、大抵の大人は「いけません。うちにはペットを飼う余裕なんてないの」と断るのが普通だろう。例え、ペットを飼う余裕があつたとしても、だ。子供のわがままなど、いちいち耳を傾けていたらキリがないからだ。

そのため、宗一郎は「飼う余裕がない」と、子供のようにせがむ小さな神様 天子に告げた。

無理だと解つた瞬間、天子は子供同然に暴れ始めた。腰まで伸びたピンク色の髪は乱れ、赤と白の巫女装束がテーブルの上でのた打ち回る。十センチという小さな身長のせいか、ハムスターが転げまわっているようにしか見えなかつた。

ひとしきり暴れまわると、天子はボソリと呟いた。

「じゃあ、ネコでいい」

神様であつても生まれたばかりなので、思考もほほ子供同然である。

つまるところ、貪欲なのだ。

「ダメ！」

宗一郎は母親の如く、天子を叱りつける。

「イヌもネコもダメ！ 最大はクマから最小はカメまで……ペットは全つつ部ダメ！！」

そもそも宗一郎にとつて、天子自体がペットのような存在なのだ。現状でも天子の世話でいっぱいいっぱいなのである。

できること、できないこと？（後書き）

小さな神様は、人間にせがむ。犬が欲しいと。
無邪気な願いは受け入れられず、ただただ失望の中を彷徨うしか
なかつた。

翌日、天子は大きな箱を見つける。
自身と同じく、無邪気な目を持った相手が住む、その箱を

次回『できること、できないこと？』
どうぞ、ご期待あれつ。

できることがある、できないこと?

と云う騒動が昨日のこと。

そして今日。

リビングのテーブルには、申し訳なさそうに正座した天子と、冷たい眼差しでそれを見下ろす宗一郎の姿があった。

「天子……昨日のこと、覚えてるよな」

天子から少し離れたところにある、ダンボールを見やる。

「あ、うん。覚えてる」

「そうか」

へつへつへ。

ペタンと垂れ下がった耳、全身を覆いつくすフサフサの体毛。黒真珠のような瞳を二つ埋め込まれた生き物を指さす。

「これ、なに」

ダンボールの中でしつぽを振るそれを見て、天子は答える。

「……静岡産の三ヶ日みかん」

「だれがダンボールの字を読めといつたんだよ!」

「静岡のみかんはとっても美味しいんだ……」

「じゃあ今度買つてやるから、これ、元の場所に返してきなさい」

「これじゃない。飯綱いづなだもん」

天子に名前を呼ばれ、小さな返事で応える子犬の飯綱。

それは茶色と白が交じった、パンダのような顔が特徴のキヤバリアだつた

できることがある、できないことがある。（後書き）

石動家に新たにやつてきたのは、ダンボールを唯一の住み処とするキャバリア・キングチャーリーズ、スパニエル。

宗一郎は呆れながらも、天子を説得にかかるのだった

次回『できることが、できないことが？』
どうぞ、ご期待あれ。

できることがある、できないこと?

宗一郎は、飯綱が「キャバリア」と呼ばれる小型犬であることを知っていた。

何故なら、昨日天子が見ていた捨て犬を育てるドキュメンタリードラマに出てきたのだ。

そして天子が「イヌが欲しい」と言い出したのも、その番組に影響されたからである。

もつとも、テレビで見たキャバリアとは違い、飯綱は全身ドロだらけなのであるが。

「何が『飯綱』だよ……それじゃイタチじゃないか」

反省する天子の隣で宗一郎は、飯綱にあれこれとやつてみる。

お手、おかわり、お座り、伏せ、『ロロン』……。

宗一郎の言葉に全く反応しないまま、飯綱はただただ好奇心を含んだ瞳を向けるだけだった。

「ん……天子、三文で飯綱との出会いを説明しろ」「見つけた。

拾つた。

そしたら怒られた

最後の部分だけは、憎しみが込められていた。

「当たり前だ!」

不満を隠そうとしない天子に、全力で小さなおでこを小突いてやりたくなる宗一郎。

以前にも一度、同じような衝動にかられ、つい小突いてしまったことがあった。

しかし、何時ぞやに鉄骨を防いだバリアの縮小版を出され、宗一郎は向かいの壁に激突して失神したのだった。

そのため、頭で小突こうと考えても身体が拒否反応を示す。

「ま……どちらにしろ、『』 飯綱は捨てられてたっぽいしな

先ほど、宗一郎は飯綱に色々と試してみた。

基本的な「お手」や「お座り」などには何の反応も見せなかつた。首輪もなく、飼い犬であるとは思えない。

しかし、キヤバリアという犬種が捨てられるといつこととは考えにくい。

だが、いつして目の前に飯綱がいるという以上は、認めざるを得ないのだ。

「うん。だから拾つてきたんだ。昨日のテレビでもヒロは拾つたろう?」

ミヒロとは、昨日のテレビで捨て犬を育てた、ヒロインの名前だつた。

「それにさ……似てるんだ、僕とさ」

天子は宙に浮き上がり、飯綱に近寄る。

「どこに行けばいいのか判らない。どうすればいいのか解らない。飯綱この子を見るとね、初めてソウイチロウとあつたときの僕を思い出すんだ」

飯綱が天子を見つめる。瞳はまるで「お母さん」と言ひ出しそうなくらい、信頼の眼差しを向けていた。

「僕はソウイチロウに助けられた。だから僕も、この子を救っちゃダメかな」

天子が飯綱の頭を撫でてやる。すると、鼻で小突いた後、天子よりも大きな舌がべろりと、小さな身体を舐めた。

「ダメ、かな?」

天子と飯綱に見つめられた宗一郎は、首肯するしかできなかつた

できること、できないこと？（後書き）

自身の境遇と子犬を重ねた天子は、同情心からつい持ち帰つてしまつ。

子犬を戻してくるように言い聞かす宗一郎も、天子と飯綱の瞳には叶うことが出来なかつた。

しばらくして、石動家からは犬の鳴き声が聞こえるのだった

次回『できること、できないこと？』
どうぞ、ご期待あれ。

できることがある、できないことがある？

「コラア！ 何度言わせれば解るんだ！！」

飯綱が来てからというもの、宗一郎が怒る回数が多くなった。
「天子……散歩から帰つたらちゃんと飯綱の足を拭けつていつも言つてるだろ！」

主に怒られているのは天子であるが。

「ごめんごめん。さあ飯綱、きれいにしようねー」

自分の顔ほどあらう飯綱の手足を、濡れたタオルで器用に拭いていく。

宗一郎は手伝わず、少し離れた場所で見ているだけだった。
飯綱を飼う上で一つ、宗一郎は条件を出した。

それは『飯綱の世話ができるようになること』である。
濡れタオルの用意や餌えさ買出しなどのサポートはするが、実際に飯綱の世話をするのは天子に任せていた。

飯綱を飼い始めて数日。

些細なミスは多々あるが、それでも天子は一人で面倒を見ている。
「ほら飯綱、おいで！」

天子がリビングへと消えていく。わん、と小さな返事をして飯綱が後を着いていく。

それに飯綱は、天子によく懐いていた。

子供同士氣が合つただろうか、天子と飯綱は一日中動き回つている。

リビングを覗くと、ソファーの上でじやれ合つていた。

小さな神様が笑い声をあげ、子犬がしつぽを振る。

こんな日常が毎日やつてくると思つと、宗一郎は胸が妙にむず痒がゆくなるのだ。

無駄に広い庭付きの一軒家は、犬一匹を飼つても狭さを感じない。

天子と飯綱が騒ぐことで、寂しかった家に活気が宿る。

宗一郎は、まだまだ厄介ごとを起こす天子と新しくやつてきた飯綱の面倒を見なくてはならない。だから自分が急に父親になつたかのように思うときがある。

こんな家族がいても、いいのかかもしれない。

「おーい、飯の時間だぞ」

「はーい！」「ワウ！」

できる」と、できない」と。 (後書き)

河川敷を疾駆する、一匹の子犬とフリスビー。
綿の如き尾をふり、ご主人の元へしたり顔でやつてくる小さな狩人。

天子は言つ。

「今度は僕が投げさせておくれ」と

次回『できること、できないこと?』
どうぞ、『期待あれ』。

できる」と、できない」と?

数日後。

週末の土曜日は、絵に描いたような雲一つ無い快晴だった。宗一郎は川に向かい、丸いフリスビーを思い切り投げる。

「そらいけ飯綱」

クラウチングスタートのように身を縮こめていた飯綱が河川敷を縦に突っ切っていく。

小さな身体を一生懸命に動かし、見事ジャンピングキャッチを決める。

「すごいねえ……今度は僕にやらせてくれないかい？」

「ああ」

ぴょこぴょこと跳ねるよう、飯綱が宗一郎の元へ戻つてくる。

「えらいえらい。ご褒美にしつぽを一本増やしてあげるよ」

「やめんかい」

「えー。しつぽの数だけ、靈力が溜まるのに

「溜めんでいい。それよか、投げないのか？」

そうだった、と天子はフリスビーを持ち、軽く腕を振る。

暖簾を払うくらいの、軽い動作だった。

ショコン、と風を切つてフリスビーは低空を滑るように飛んでいった。

「た。

すかさず飯綱は転身、滑空する円盤を追う。

風にそよぐ草を切斷しながら、フリスビーは川の手前に落ちた。

数秒遅れて、飯綱がフリスビーの着陸地点にたどり着く。

「危ないなあ……もし人がいたら、足を撥ね飛ばすとこだった。気をつけないと」

フリスビーを凶器に変えた本人が、のほほんと言つた。

それからしばらくの間、天子は休みなくフリスビーを投げ、飯綱は疲労の色も見せず何度もフリスビーを咥えて戻ってきた。

これは買つてよかつたなあと、宗一郎は一人頷いたのだった

できること、できないこと。（後書き）

小さな姿をしていても、天子の力は神のソレだった。
そんな彼女は自らの力を自覚していないのか、上手く扱えないことさほど気にする様子はなかった。
日常に、神様が馴染んでいく

次回『できること、できないこと？』
どうぞ、『期待あれっ。』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5990y/>

おまもりやどり

2012年1月8日18時53分発行